



Courtesy of Armand de Mestral

ベーツアルバムの中から、私のお気に入りの1枚をご紹介します。写っているのは、カナダ人宣教師です（後列左より：W. J. M. クラッグ、M. M. ホワイトティング、前列左より：H. F. ウズウォース、H. W. アウターブリッチ、C. J. L. ベーツ）。右下のメモ書き「1920」から、ベーツの院長就任1年目であることがわかります。カナダに帰国したベーツが関西学院で過ごした日々を大切に思っていることが伝わる1枚だと思います。イキイキとした5人の表情が素敵です。



ベーツアルバムは「3Dメガネ」

小澤 みのり

私は現在、第4代学院長 C. J. L. ベーツの写真アルバムをデータベース化する作業を大学博物館で行っています。ベーツ一家の写真アルバムは、関西学院の教員や学生、ベーツの家族や親戚、メソヂスト教会の宣教師など、人物の写真が中心です。したがって、アルバムをデータベース化する作業とは、2,000枚を超える写真の1枚1枚に目を通し、手がかりのある写真を基に時代や場所を判別し、知らない人々の顔を見分けてパソコンにデータを打ち込む作業、といえます。面白いことに、何ヶ月もの間、1,000枚～2,000枚もの写真を見続けていると、いつの間にか写真が撮られた時代(1900年代～1940年代前後)の日本の雰囲気や、自分自身の体感として得られるようになってきました。例えば、ある本を読んでいて、1910年頃の描写の箇所が出てくると、ベーツの写真アルバムで見た1910年頃の時代の雰囲気が頭に浮かんできます。そして、本の描写と、その時代の雰囲気が頭の中で混ぜ合わせられ、まるで3Dのように文章がイキイキと浮かび上がってくるように感じられます。

また、ベーツ写真アルバムは、関西学院の資料という文脈にとどまらず、明治・大正・昭和という激動の日本社会を撮影した資料として、歴史学・民俗学においても重要な資料だと私は思います。第二次世界大戦へと移行しつつある1930年代後半の写真では、学生が上ヶ原の敷地内で小銃を手に整理している写真もあり、高まる緊張感が伝わってきます。しかし、同時期の写真なのに、意外なほど朗らかな表情の学生や教員たちの写真も残されています。以前、講義の中である先生が「どんな専門家でも、誰も昔のことは知らないのです。昔のことについて知っていると思っていることは、現段階での暫定的な事実にすぎません。」とおっしゃっていたことを思い出しました。自分のなかに作りあげられた「昔」のイメージとは、一体「いつ」「どの」「昔」なんだろうか。今まで少しも疑ったことのなかった、古臭くて埃まみれの「昔」へのイメージは、ベーツの写真アルバムを通すことによって、まるで3Dメガネを通して見るかのようにイキイキとした表情として映るようになりました。

50年以上前に作られたある一家の写真アルバムから、まったく新しい世界の見方を学ぶ日々です。

2018年度前半の関西学院大学博物館展覧会（西宮上ヶ原キャンパス）

4月2日（月）～ 5月26日（土）

平常展「Gift for the Future 関西学院のあゆみ - 学院の息吹・原田の森 -」

6月4日（月）～ 7月21日（土）

企画展「ポスターでたどる戦前の新劇」

8月1日（水）～ 10月20日（土）

平常展「Gift for the Future 関西学院のあゆみ - 学院を築いた4人の院長 -」

特集陳列「第4代院長ベーツがのこした写真アルバムから」